

田村悟史コレクションの受け入れ経緯およびコレクション概要

三島, 美佐子
九州大学総合研究博物館・開示研究系

<https://doi.org/10.15017/2558888>

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告. 15/16, pp.31-34, 2018-03. The Kyushu University Museum

バージョン：

権利関係：

田村悟史コレクションの受け入れ経緯およびコレクション概要

三 島 美佐子

九州大学総合研究博物館・開示研究系：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

要旨：九州大学総合研究博物館は、2014年にSPレコードと蓄音機を含む記録資料の寄贈を受け、「田村コレクション」と称することとした。本報ではその受け入れに関する経緯と、コレクションの内容についての概要を報告する。

キーワード：地域資料、SPレコード、78s、蓄音機、宝珠山、寄贈

1. 資料受け入れの背景

1-1. 田村悟史氏と手仕事舎

故・田村悟史（本名・中村孝一、1940 - 2009）氏は、1990年に東京から現在の福岡県朝倉郡東峰村宝珠山に移住した記録映像作家である。「記録制作・手仕事舎」として活動し、宝珠山村¹や小鹿田焼の里である皿山（日田市源栄町）²の記録映像制作に携わった。1992年より旧宝珠山中学校校舎を「宝珠山小劇場」と名付け、「SPレコード研究会」と称した上演会や文化人の談話会などを開催した。

2009年に田村氏が死去した後、「手仕事舎」はスタッフらに引き継がれ、引き続き「SPレコード研究会」やカフェが営まれていた。しかしながら、スタッフの高齢化や活動拠点としていた旧宝珠山中学校校舎の老朽化に伴い、2013年3月末をもって「宝珠山小劇場」は活動を停止し、2014年3月に完全閉館した。

1-2. 閉館に伴う手仕事舎の物品処分

「宝珠山小劇場」の活動停止とその後の閉館に伴い、田村氏らが東京時代から収集してきた約4万枚のSPレコードと蓄音機、田村氏が東京在住時に調査・記録していた芸能・文化関連の記録資料、移住後に作成された記録映像の関連資料、「手仕事舎」で使用されていた映像制作関係の機器類、「宝珠山小劇場」に常設されていた書籍等の

物品が処分されることとなった。

御遺族の中村美恵子氏は、知人や古書店、公共博物館等に、物品の譲渡や寄贈を計画された。中村氏によれば、SPレコードや蓄音機については、単体または小規模での引き取りの申し出はあったが、全てのレコードと蓄音機を包括的に引きとれる主体がなかったという。また特に、記録資料にあたる、田村氏による芸能・文化関連の調査記録や、映像制作に伴う初期映像や関連資料については引き取り手がなく、廃棄するほかない状況になりつつあった。

2. 当館への受け入れの経緯

2-1. 九大博物館への打診と館内での検討

2013年末ごろ、本学大学文書館の折田悦郎教授より、SPレコードと蓄音機の包括的な受け入れ依頼が来ているという情報が当館にもたらされた。翌2014年2月、文書館より、「宝珠山小劇場」がいよいよ3月で閉館となるが、博物館での資料の包括的受け入れができないだろうかという打診メールが内々に送られて来た。すでに福岡県立図書館、福岡市立図書館、福岡市博物館等にも打診がなされていたが、資料の分量が各館の許容範囲を超え、また資料内容が各館の趣旨にそぐわないなどの理由により受入不能となっていた。そこで九州大学附属図書館および大学文書館を含め、九大に受け入れの打診がなされ

たものであった。

2014年2月中旬に開催された当館教員会議³にて、資料受け入れの打診に関する報告が三島よりなされたさい、将来的な一般向けの活用が期待できる⁴ことなどから、文書館・図書館・芸術工学研究院との協議を含め、前向きに検討することとなった。

2-2. 受け入れに先立つ事前調査および評価

2014年2月中旬の教員会議後、受け入れに先立つ現地視察を実施し、それに基づき受け入れの可否を検討することを、文書館経由で寄贈者（中村氏）に伝えた。同時に、筆者が主担当となり、現地での資料評価のための人選と日程調整をすすめた。

2-2-1. 現地視察

実施日 2014年3月7日（金）

現地視察時間 10～12時

視察者による協議 12～13時

視察者（所属は当時）

九州大学総合研究博物館 岩永省三・三島美佐子

九州大学大学文書館 折田悦郎・藤岡健太郎

九州大学芸術工学部 津田三郎

九州大学高等研究院 松本隆史

福岡市博物館 有馬学

長崎科学技術大学 竹田仰

2-2-2. 現地で確認された資料類

現地にて確認した資料は、SPレコードおよび蓄音機、書籍、美術館・博物館ポスター、音楽関連資料、機材（再生装置、録画装置等）類、小鹿田焼関連記録資料、記録動画、映像録画、写真類、スクラップブックなど。

2-2-3. 評価

視察者らによる協議において、全体として文化史・昭和史資料としての価値がある、SPレコード・蓄音機共に質が高い、美術館・博物館ポスターも資料的価値がある、スクラップブックのうち特に小鹿田焼調査資料（インタビュー記録等）は重要である、などの意見が出た。また、書籍については、一部を省き一般的な書物であるため、古書店による引き取りが望ましいこと、機材一式は復元資料として全体を引き取ることが望ましく、また、撮影

機器類には希少性・貴重性があり系統だった教育や展示等への活用が可能、などの意見が出された。いずれもこれまで九大博物館では取り扱ってこなかった内容の資料であるが、全学的にみれば取り扱い可能であり、新たな研究プロジェクトの素地となることが指摘された。一方で、教育・研究利用のみならず、一般向けの催事や展示等に利活用できる点も評価された。

2-2-4. 受け入れの決定

上記事前調査と協議・評価については、2014年4月下旬に開催された当館内教員会議において報告・審議され、上記資料・機器等について当館に包括的に受け入れることが承認された。また、受け入れに伴い、関連する研究分野の資料部を新たに加えることが申し合わされた⁵。当初「宝珠山コレクション」と仮称したが、地名では誤解が生じる可能性があるとして、主たる収集者の氏名を冠し「田村悟史コレクション」と称することとなった。

2-3. 資料移設

2014年4月下旬、旧宝珠山中学校現地にて運送業者による見積もりを実施したが、経費が高額となったため、当面は館員およびボランティアにて自力で運搬した。搬出は、2014年9月から翌2015年3月にかけて、計7回実施した。うち3月の運搬については、搬出期限に間に合わせるため、また、大型機器の搬出が必要であったことから、業者委託とした。

3. 移設後の状況

3-1. 資料の保管状況

運び入れた資料は、旧工学部本館地階の2室および4階の1室に設置したアングル棚に仮配置し（図1）、大型蓄音機については、4階会議室に配置（図2）した。地階は高湿度など環境が悪いが、収蔵スペースの都合上止むを得ない状況となっている（2018年3月現在）。



図1. 資料の収蔵状況の一部。ここで見えている箱には SP レコードが入っている。



図2. 蓄音機の配置状況。

3-2. 資料の一次資料化の状況

2015年4月以降、当館にて雇用された技術職員らにより、移設資料の一次資料化が進められている。まずは機器類について、ナンバリング、リスト化、初期的な写真撮影を行い、それらをデジタル的に統合し、暫定的な「宝珠山資料カタログ」を作成した。

最も分量のある SP レコードについては、手仕事舎による簡易なデータベースが、エクセルファイルとして存在した。このリストの詳細については、大久保(2018)⁶による報告を参照されたい。当館としての SP レコード自体のデータベース化は、SP レコードの専門家である大久保真利子氏による助言をいただくようになった2017年から開始した。盤面をスキャンし、そのレーベル情報を元に手仕事舎によるエクセルファイルを書き換える形で、現在もデータ化をすすめている。

4. コレクション概要

機器類と SP レコード以外の資料の一次資料化は進んでいないものの、以下コレクションの規模を、物品や媒体の種類を元におおまかに記す：

(1) SP レコード・蓄音機関連

SP レコードは、現在は収蔵スペースの都合で段ボール1箱あたり約20-50枚を詰めた状態で、約2400箱分(図1)。ほか、レコードケース14箱分、ジャケット62箱分。蓄音機は、大型3台(図2)、ポータブルタイプ6台、針・部品など約1箱分。

(2) 記録媒体

録音カセットテープが靴箱サイズの箱に28箱分、ケース入りのポジフィルムが段ボール27箱分、8mmフィルム226本、VHS28本、BCM12本、ドキュメンタリー制作に伴い収集・保管されたとと思われる旧宝珠山村関連の資料段ボール5箱分。なおカセットテープには、(3)の宝珠山村関係の音声・映像、(4)の島田敬一へのインタビュー録音が含まれる(図3、図4)。



図3. 「宝珠山日記」録音テープ。

(3) 「宝珠山村日記」関連

ドキュメンタリー「宝珠山村日記」作成のために収集・保管されたとと思われる資料が、段ボール5箱分。



図4. 俳優・島田敬一へのインタビュー録音テープ。

(4) 文化活動記録・構想関連

田村が制作構想のために収集していた切り抜きや関連情報等が段ボール51箱分、宝珠山劇場関連の実践記録等が段ボール7箱分、新派俳優の井上正夫関連が段ボール2箱分、俳優の島田敬一関連が8箱分（図4）。

(5) 映像制作に関わる機材（図5）

手仕事舎で用いられた撮影装置、編集機器・装置、録画再生装置、リールなど。



図5. 機器の一部。梱包したまま保管している。

(6) その他

SP・音楽関連書籍約600冊、美術館・博物館ポスター14束。

5. おわりに

本報では、2014年に寄贈された、田村悟史コレクショ

ンの受け入れ経緯と、おおまかな概要を記した。コレクションのうち特に、1990年代の宝珠山村の音声・動画記録や晩年の俳優の音声記録は興味深い。また、研究対象として未開発でもある在野の活動実践記録やスクラップなど、今後のさらなる調査・分析が待たれる。なお九大博物館では、2017年以降、本コレクションのSPレコードと蓄音機を用いた演奏会などの活用を開始しており、「死蔵させないこと」という寄贈者の要望に、今後も引き続き応えていく必要がある。

謝辞

当該コレクションを御寄贈下さり、その後継続的なご協力をいただいている中村美恵子氏に深く感謝いたします。また、資料運搬においては、ボランティアのみなさまのご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

脚注

- 1 短編記録映画「宝珠山村日記」、記録制作手仕事舎、1996年制作。
- 2 長編記録映画「日田の皿山」、記録制作手仕事舎、未完。これに関連する資料および元映像は、すべて日田市役所に移管されたという。
- 3 正式には「総合研究博物館教員会議」。館の専任教員による当館の公式の意思決定の場であり、議題の審議・承認と各種報告がなされる。
- 4 当館所蔵品は従来、学術研究の過程で収集された研究資料であったため、催事等で来場者に気軽に楽しんでもらえるような文化芸術的なものが当時はほとんどなかった。
- 5 「資料部」は、当館資料に関わる研究・協力を担う兼任教員で構成されている。田村コレクションに関わる兼任教員が所属する「記録資料部門」が設置されたのは、実質的な活用が始まった2017年度からである。
- 6 大久保真利子 2018「田村悟史作成のSPレコードデータベース——その特徴と公開に向けての課題——」九州大学総合研究博物館研究報告15-16：35-43。

（査読なし）